

読書のすゝめ

その30

H28

10/14

祝！優良賞

第62回青少年読書感想文 全国コンクール茨城県高等学校の部

夏休みの課題（↑宿題というのがイヤですが）で提出されたみなさんの感想文の中から、3編が県の審査会に提出され、**成島愛波さん**が優良賞（上位30編）に選ばれました。おめでとうございます！

2年 成島愛波さん「生きることを選択すること」

（『君の隣をたべたい』住野よる）

2年 長岡瑠翔さん「手紙」（『ツバキ文具店』小川糸）

2年 高野佳恋さん「贖罪」と私たち」（『贖罪』湊かなえ）

県東地区では23編、県全体では189編の応募がありました。

（応募校は75校です）

県三賞は次のとおりです。今回は課題図書から優秀賞2編ができました。



最優秀賞（知事賞）

植田帆乃香さん（太田一）

優秀賞（県議会議長賞）「構造的暴力からの脱却の為に」

（『シンドラーに救われた少年』レオン・レイソン）加藤大河さん（水戸葵陵）

優秀賞（県教育長賞）「今を変える力」（『ハーレムの闘う本屋』ヴォーンダ・ミシヨール）

戸島七海さん（水戸二）

他 優秀賞と優良賞が12月発行の読書感想文集「いばら」第45集に掲載されます。

「感想文」って何でしょう。

書くことが苦手、という以前に、本を読むことが好きではない、という人が多いように思います。まず、心を充たしてくれる時間、自分と向き合う時間、しかも、自分のペースでできる「読む」ことの喜びを一人でも多くの人に知ってもらいたいと思います。次に、本を通して得た感興を文字におこしてみる。「書く」ことによって自分の考えを整理することができます。心に残った一行を書き留めてみて、なぜその一行を選んだのかを自分自身に問いかけてみてはどうでしょう。そのことがまさに「感想文」になるのです。

今回 本校で選ばれた三人の感想文は、一冊の本を通してそれぞれに自分と向き合い、自分に問いかけ、高校生らしい素直な表現のもので大変好感の持てるものでした。随時掲載し、みなさんに紹介したいと思います。

話題の本



『何者』朝井リョウ（新潮社） 直木賞受賞作

企業に入れば「何者」になれるのか、自分は「何者」になりた
いのか。そんな疑問を抱えて就活を進める中、5人はそれぞれ
の思いや悩みをツイートするが、一緒に過ごすうちに徐々に人間
関係が変化していく。思うようにいかない現実にはだれを隠せ
なくなっていく中で、内定者が現れたとき、抑えられていた妬み、
本音があらわになっていく。そして彼らはようやく自分を見つめ
直す。果たして自分は「何者」なのか。

※日本図書館協会のタイアップポスターを図書館前に掲示中！

『何様』朝井リョウ（新潮社）

何者かになったただなんて、何様のつもりなんだろうー『何者』
アナザーストーリー6篇。

生きていくこと、それは、何者かになったつもりで自分の裏切ら
れ続けることだ。光を求めて進み、熱を感じて立ち止まる。

光太郎が出版社に入りたかったのはなぜなのか。理香と隆良は
どんなふうに出会って暮らしたのか。瑞月の両親には何があ
ったのか。拓人を落とした面接官の今は。立場の違うそれぞれの
人物が織り成す、就活の枠を超えた人生の現実。

